中学校運動部活動顧問教師のストレスに関する研究 ー運動部活動顧問教師用ストレス尺度の作成及び属性間による比較検討ー[†]

古川 拓也* 舟橋 弘晃** 横田 匡俊***, ****
 間野 義之*****

A Study on Teachers' Stressors in Junior High School-Based Extracurricular Sports Activities: Development of a Stressor Scale and Comparison among Attributes[†]

Takuya FURUKAWA*, Hiroaki FUNAHASHI**, Masatoshi YOKOTA***, ****
 and Yoshiyuki MANO*****

Abstract

The aim of this study was to develop a teacher's stressor scale for junior high school-based extracurricular sports activities and to compare cognition of stressors among attributes. The participants of this investigation were 1042 teachers who coach extracurricular sports activities; randomly selected by stratified sampling. Respondents were 373 teachers (males : 293, females : 80). Exploratory factor analysis revealed 7 factors (e.g. time burden of extracurricular sports activities and difficulty of communication with students) that were composed of 24 items. In addition, construct validity and reliability of the scale were confirmed by confirmatory factor analysis and Cronbach's alpha. The result of t test and one-way analysis of variance revealed significant differences between attributes. In this study the validity and reliability of the teacher's stressor scale for junior high school-based extracurricular sports activities were confirmed. The results of comparisons among attributes suggested that different teachers' attributes were also different from the cognition of stressors.

Key words : Junior High School-Based Extracurricular Sports Activities, Stressor Scale, Factor Analysis, Comparison of Attributes

[†]原稿受付 2015年7月13日 原稿受諾 2015年12月7日

*早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5

**早稲田大学スポーツ科学学術院 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5

***株式会社三菱総合研究所 〒100-8141 東京都千代田区永田町2-10-35

****早稲田大学スポーツビジネス研究所 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5

*****早稲田大学スポーツ科学学術院 〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1

* Graduate School of Sport Sciences, Waseda University, 2-7-5, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo, Japan (202-0021)

** Faculty of Sport Sciences, Waseda University, 2-7-5, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo, Japan (202-0021)

*** Mitsubishi Research Institute, INC., 2-10-35, Nagatacho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan (100-8141)

**** Research Institute for Sport Business, Waseda University, 2-7-5, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo, Japan (202-0021)

***** Faculty of Sport Sciences, Waseda University, 3-4-1, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo, Japan (202-0021)

1. はじめに

我が国において、学校の運動部活動は顧問教師（以下、顧問）（注1）の積極的な取り組みに支えられてきた¹⁾。実際に、教師の残業時間における業務内容に部活動指導が多く挙げられており²⁾³⁾、各国と比較してもスポーツ指導などの課外活動に費やす時間が多い⁴⁾ことが報告されている。また、部活動指導の職務としての曖昧さ⁵⁾⁶⁾、時間外指導手当の支給額⁷⁾、顧問教員の専門性の不足⁸⁾などの指摘があり、顧問に関わる問題に関心が寄せられている。

顧問は生徒の人間的な側面を指導する教師の役割を果たすと同時に、競技における技能の向上や試合での勝利といった目標達成のためコーチとしての役割を担わなければならない。「教育的/競技的二重空間」⁹⁾の中で指導を行っているといえる。そして、この「教育的/競技的」な二重の側面により、顧問は指導場面において比較的解決が困難であるとされる葛藤に直面する¹⁰⁾。例えば、競技力の高い部員が公式戦への出場ではなく、受験勉強を優先させたいと申し出てきたときや、顧問自身の家庭事情と部活動の事情どちらを優先するべきかなどの葛藤が考えられよう。このような運動部活動の特徴から顧問が指導を行う環境は非常に複雑であり、先に挙げたような運動部活動に関する様々な課題の中で部活動の指導を行っていることを鑑みると、運動部活動の顧問は多くのストレスフルな状況・出来事と遭遇していることが推察される。

そこで本研究は、顧問が運動部活動において認知しているストレスを明らかにし、顧問のストレス尺度を作成することを目的とする。さらに、顧問や部活動の属性によって認知されるストレスの程度が違ふことが考えられるため、本研究では顧問と部活動の属性によるストレスの認知の違いを明らかにすることも目的とする。なお、本研究では、中学校の運動部活動顧問を研究対象とした。高校は受験があることで、部活動へ同じような志向性や目標を持った部員が集まりやすいことが考えられ

る。一方で中学は、多くの生徒は自身が住む学区内の中学校へ進学する為、部活動へは多様な志向性や目標を持った部員が存在していると推察される。その結果、学習指導要領における部活動の取り扱い中学校と高校に違いは見られないが、中学校の顧問の方が多様な部員に向けた運営の工夫や指導の工夫が求められ、より多くの困難や葛藤、不安を抱えていることが考えられる。さらに、中学校の方が運動部活動への顧問就任率が高い¹¹⁾。したがって、本研究では中学校の顧問に着目することにした。

昨今の運動部活動の指導の充実に向けた取り組み¹⁾が推進されているように、運動部活動の顧問に着目した研究の蓄積は非常に重要であるといえる。政策や学校の計画を立案する際に、顧問のバーンアウト要因や指導態度を規定する要因、体罰に至る経緯など実証された根拠として活用可能となるからである。その様な観点から、顧問が遭遇する出来事や周囲の環境を、顧問自身がどの程度ストレスとして認知しているかを明らかにする本研究は、基礎的研究と位置付けられ、発展可能性を有している点で意義深いと考える。

2. 先行研究の検討

これまで教師とコーチそれぞれの職業においてストレスに着目した研究が行われてきている。教師のストレスに着目した研究はKyriacou and Satchell¹²⁾をはじめとして、海外や国内に研究の蓄積がみられる^{13)~19)}。例えば、Borg et al.¹³⁾は、教師ストレス、教師の職務満足、キャリアコミットメントの関係性を検証し、さらにストレス要因を抽出している。また、性別や職務経験など属性ごとの比較を定量的に行っている。その中で、ストレス要因として「児童の問題行動」「時間/資源の困難性」「専門的理解の必要性」「関係性の欠如」といった因子が抽出されている。また、Klassen et al.¹⁴⁾は、「教室内ストレス」と「作業負担ストレス」が職務満足に与える影響と、媒介変数としての教師の自己効力感の関係性を明らかにしてい

る。このように教師のストレスに着目した研究の蓄積が進み、西坂¹⁹⁾によれば、先行研究では教師のストレスの構成概念として主に、「子どもの問題」「同僚との関係性」「専門性」「多忙」などが明らかとなっている。さらに、近年競技スポーツ場面のストレス研究で、定性的な研究を中心にコーチを対象とした研究が行われており、コーチが認知するストレスとして、パフォーマンスストレスと組織的ストレスが抽出されている。パフォーマンスストレスは、コーチが経験する選手のパフォーマンスに関すること、もしくはコーチ自身の能力とパフォーマンスに関することをストレスとしている。組織的ストレスは、コーチが属する組織の運営に関連することをストレスとしている^{20) - 22)}。例えば、Thelwell et al.²¹⁾はエリートアスリートへの指導を行っているコーチを対象にインタビュー調査を行った結果、「選手のパフォーマンス」、「コーチ自身のパフォーマンス」の要因から構成されるパフォーマンスストレスと、「環境」、「リーダーシップ」、「個人」、「チーム」といった要因を含んだ組織ストレスの2つの概念をコーチストレスとして抽出している。

運動部活動におけるストレス研究は、渋谷他²³⁾²⁴⁾が部員生徒を対象に行ってきた。顧問のストレスに着目した研究は、渋谷²⁵⁾が顧問のストレス尺度作成のための予備的研究と位置づけて、高校の顧問の悩みや負担の実態を定性的に明らかにしている。具体的には、「部員」「活動環境」「指導力」「時間的負担」「金銭的負担」「体力的負担」「制度の不整備」「顧問間の人間関係」の8つのカテゴリーを顧問の悩みや負担として分類した。これまで教師やコーチのストレスについて様々な検討がなされてきているが、「教育的/競技的」な二重の役割を併せ持つ運動部活動の顧問のストレスについては、渋谷²⁵⁾の研究以降散見されない。よって、渋谷²⁵⁾の研究を発展させ、定量的な研究を行うことで顧問の認知するストレスの実態を明らかにすることは意義を有すると考えられる。

3. 方 法

3.1 調査対象および手続き

調査対象は関東地方におけるA県B市の中学校運動部活動の顧問1,042名とした。サンプルの抽出方法は、B市内の地域を行政区ごとに東西南北の4区分、学校規模を各校のクラス数から大中小の3区分を設定し、各層に存在する学校数の比率と比例する対象校数を無作為に抽出した。全国の公立中学校教職員数は253,829人²⁶⁾であり、運動部活動顧問教員数を6割であると想定²⁾すると152,297人が母集団として考えられる。信頼区間95%、母集団比率を50%、許容誤差を5%と想定し、必要となるサンプル数の算出を行った結果、383以上のサンプルが必要であることが明らかとなった。抽出の際には、調査票の回収数が383以上となることを想定した。その結果、48校を抽出し、対象校となった中学校運動部活動の顧問を調査対象者とした。

調査方法は、A県B市の教育委員会を介した郵送法による質問紙調査を行った。調査期間は2013年10月～11月であった。質問紙の配布数は1,042部で、786部を回収（回収率75.4%）し、分析に必要な項目全てに正しく回答したものを有効回答とした。また、部活動の活動場所に行き、直接指導をすることが1週間のうち1度もないと回答した対象者は分析対象外とした。その結果、有効回答数は想定していた383部より少ない373部（有効回答率35.8%）となった。ただし、本調査で得られた有効回答数は母集団の許容誤差5%～6%内であるため、本研究では母集団を代表するサンプルとして問題ないと判断し、373部を以後の分析に用いた。

3.2 分析項目

3.2.1 属性

属性は、性別、年齢、学校内における主幹教諭や主任等の責任ある役職の有無、顧問もしくは副顧問を務めているといった部活動での役割、顧問を担当している部活動競技種目の過去の経験の有無、1週間の指導頻度といった顧問

自身の基本的な属性に加え、部活動に関する属性として担当部活動の部員数、過去3年間で最高位の大会競技成績、土日の活動時間を設定した。なお、過去の3年間の大会競技成績は「市大会」「県大会」「関東大会以上」、土日の活動時間（注2）は「4時間未満」「半日：4時間以上」「概ね全日」の3つの選択肢から回答を求めた。1週間の指導頻度と部員数は記述式で回答を求めた。

3.2.2 ストレッサーに関する項目

顧問のストレス尺度作成に向け定性的な研究を行っている渋谷²⁵⁾および教師ストレス尺度作成を試みた先行研究¹⁶⁾¹⁷⁾を参考に、中学校の運動部活動の顧問に適した内容となるよう項目の修正を行い、44項目を作成した。なお、項目作成に際しては、コーチストレス研究が近年着目され始めた蓄積の少ない分野であること、一方で教師のストレスは研究の蓄積が十分にある分野であることから、渋谷の研究²⁵⁾のみならず教師のストレス尺度の項目を参考とした。ただし、項目作成の際にはコーチのストレスとして明らかとなっている「パフォーマンスストレス」や「組織ストレス」に関連するような項目が含まれるよう考慮しつつ作成している。

作成された項目については、顧問の経験を有する中学校教員2名（20年以上経験）と運動部活動の施策に精通しているスポーツ政策の専門家1名、スポーツ政策を専攻とする大学院生6名によって行われた。まず、中学校教員2名とスポーツ政策の専門家1名によって、作成された項目の内容は顧問が経験し得る出来事および状況として適切かどうか検討し、大学院生6名によって、それらの項目の意味内容に誤解が生じないかどうか、文言は適切かどうか検討された。その結果、項目の修正・削除・追加を行い最終的に43項目が作成された。

ラザルス・フォルクマン²⁷⁾は、心理的ストレスの感じ方が個人によって異なることに着目し、個人のストレスに対する認知的評価を重視している。認知的評価は、個人にとっての

脅威性を評価する1次的評価と、対処可能性を評価する2次的評価の2つの過程が存在する。これまでストレスの認知的評価モデルをもとに様々なストレス尺度が作成されてきたが^{28)~30)}、岡安他は³¹⁾従来のストレス尺度は日常で経験する出来事の嫌悪性のみを評価しており、実際にどの程度その出来事に直面しているかは言及できないとしている。そこで本研究は岡安他³¹⁾を参考に、項目によって示された出来事を経験する頻度（4件法：1. 全くなかった、2. ときどきあった、3. しばしばあった、4. よくあった）と、その出来事の嫌悪性（4件法：1. 全く嫌ではなかった、2. 少し嫌だった、3. 嫌だった、4. 非常に嫌だった）について2段階での回答を求めた。経験頻度が「1. 全くなかった」もしくは嫌悪性が「1. 全く嫌ではなかった」と評価された場合、その出来事の衝撃性は無いとみなされる。つまり、ストレスとして認知されていない状態であると判断される。このことから、「1. 全くなかった」と経験頻度が評価された場合は、嫌悪性について「1. 全く嫌ではなかった」の回答とみなし、回答を求めなかった。

3.3 分析方法

3.3.1 分析1：中学校運動部活動顧問教師のストレス尺度の作成

岡安他³¹⁾に従い、ストレスに関する項目の経験頻度と嫌悪性の回答選択肢「1～4」に「0～3」の得点を与え、それらを積算したものをストレス得点として分析に用いた。

項目の弁別力の検討および尺度の内的整合性を高めるためにItem - Total相関分析（以下、IT相関分析）を行った。IT相関分析は、相関係数が $r = .40$ ³²⁾に満たない項目を削除対象とした。なお、その出来事がどの程度共通して経験されているものなのか、もしくはどの程度嫌悪を感じさせるものなのかの割合を示す経験率と嫌悪率の算出（注3）も行った。

ストレスの構成概念の検討を探索的因子分析にて行った。因子負荷量が $.40$ ³²⁾に満た

ない項目を削除対象とした。その後、探索的因子分析によって得られた構成概念を仮説モデルとして、構成概念妥当性を確認的因子分析によって検討した。確認的因子分析の際には、尺度の簡便化と因子の項目が4項目である時に最も妥当性の高い値が得られるという先行研究³³⁾の指摘を考慮し、探索的因子分析で得られた各因子の上位4項目を採用した。構成概念の妥当性を検証するための指標としてGFI (Goodness of fit index), AGFI (Adjusted goodness of fit index), CFI (Comparative fit index), RMSEA (Root mean square error of approximation)を用いた。収束的妥当性を示すためAVE (平均分散抽出)を算出し、弁別的妥当性を検証するため因子間相関の平方とAVEの比較を行った。モデルの適合度指標は、GFI, AGFI, CFIが.90以上で当てはまりが良好と判断され、RMSEAは.05以下で当てはまりが良く、.10以上で当てはまりが悪いと判断される³⁴⁾。さらに、適合度指標が著しく悪い値でなければ内容の妥当性等の総合的な観点から因子構造の妥当性を検証する必要性が指摘されている³⁵⁾³⁶⁾。AVEは.50以上、因子間相関の平方とAVEの比較では、各因子のAVEが因子間相関の平方よりも大きい値を示すことを基準値とした³⁷⁾。尺度の信頼性を検証するために、内的整合性の値を示すChronbachの α 係数を算出した。 α 係数の基準値は.70以上とした³²⁾。

3.3.2 分析2：属性間によるストレスア下位尺度得点の比較

属性とストレスア下位尺度得点の比較を行うため、ストレスア尺度の下位尺度得点を従属変数、顧問の基本的属性と部活動の属性を独立変数として、独立サンプルのt検定もしくは一元配置分散分析を行った。一元配置分散分析にて有意な差がみられた場合は、Bonferoni法を用いて多重比較を行った。なお、顧問の指導頻度と部員数は、分析の際にそれぞれ3つの群に分類した。指導頻度は1週間のうちに1日・2日指導する顧問を低頻度指導群、3日・4日

指導する顧問を中頻度群、5日以上指導する顧問を高頻度群と分類した。部員数は、小規模を5人から24人、中規模を25人から40人、大規模を41人から120人とした。

以上の分析には、統計解析ソフトSPSS statistics ver. 22およびAmos ver. 22を用いた。

4. 結 果

4.1 調査対象者の特徴

調査対象者の特徴について表1にまとめた。男性が78.6%、年齢の平均は37.2歳で、20歳代が最も多く33.2%となっている。保健体育科を指導しているのは22.8%、部活動において顧問を担当しているのが72.9%、副顧問が27.1%となった。日本体育協会が実施した調査⁸⁾によると、中学校の運動部活動指導者は男性が71.5%、年齢の平均は39.6歳で、保健体育科を指導しているのは19.8%と報告されている。よって、本調査によって得られた対象者は概ね運動部活動顧問の特徴を捉えていると考えられる。その他の対象者の特徴は、表1を参照されたい。

4.2 尺度の信頼性および妥当性の検討

ストレスアに関する43項目の記述統計結果および経験率と嫌悪率を表2に示した。経験率は26.0% - 97.1%、嫌悪率は23.6% - 89.5%を示した。岡安他³¹⁾では、対象者の90%以上が0点とした項目を削除対象としているが、本研究においては経験率もしくは嫌悪率が10%以下の項目、つまり90%以上が0点を示した項目はなかった。したがって、全ての項目が経験され嫌悪感を抱く内容として認知されている。弁別力のある項目の検討および、内的整合性を高めるために行ったIT相関分析の結果、7項目が $r = .40$ 以上を満たさず削除対象となった。

分析対象となった36項目を用いて探索的因子分析(主因子法、回転なし)を行った。固有値の減退率および因子の解釈可能性から7因子構造が妥当であると判断された。そこで、7因子構造を仮定して再度探索的因子分析(主因子法、

表 1 対象者の特徴

		n	%	M	SD
性別	男性	293	78.6		
	女性	80	21.4		
年齢				37.2	11.1
	20歳代	124	33.2		
	30歳代	118	31.6		
	40歳代	50	13.4		
	50歳以上	81	21.7		
指導教科	保健体育科	85	22.8		
	その他教科	288	77.2		
校内での役職	役職あり	117	31.4		
	役職なし	256	68.6		
部活動での役割	顧問	272	72.9		
	副顧問	101	27.1		
指導頻度				4.2	1.8
	低頻度	82	22.0		
	中頻度	118	31.6		
	高頻度	173	46.4		
過去の競技経験	経験あり	236	63.3		
	経験なし	137	36.7		
部員数				36.1	20.6
	小規模	130	34.9		
	中規模	130	34.9		
	大規模	113	30.3		
過去3年間の成績	市大会	167	44.8		
	県大会	149	39.9		
	関東大会以上	57	15.3		
土日の活動時間	4時間未満	90	24.1		
	半日：4時間以上	252	67.6		
	概ね全日	31	8.3		

プロマックス回転)を行った。さらに因子負荷量が.40に満たなかった3項目を除き探索的因子分析を行った結果、7因子構造であることが確認された。次に、尺度の簡便化と先行研究³³⁾の指摘から、各因子において上位4項目の項目を用いて再度探索的因子分析を行った。その結果、7因子24項目が抽出された(表3)。各因子の因子名と定義を表4に示す。ただし、第4因子から第7因子にかけては3項目の因子となったが、顧問が認知するストレスを構成する因子として、3項目のまま用いた。

次いで、7因子24項目の構成概念妥当性を確認するために、確認的因子分析を行った(図1)。その結果、モデル適合度はGFI = .88, AGFI = .84, CFI = .92, RMSEA = .07となった。収束的妥当性の値を示すAVEは、.48-.71の値を示した(表5)。弁別的妥当性の検証の結果、全てのAVEが各因子間相関の平方より大きい値を示したため弁別的妥当性が確認された(表5)。第6因子「学校内雰囲気との相違(AVE = .47)」には、収束的妥当性が示されなかったが、弁別的妥当性の検証においては因子の妥当

表2 ストレッサーに関する項目の記述統計および経験率と嫌悪率

項目	頻度					嫌悪				
	min.	Max.	M	SD	経験率	min.	Max.	M	SD	嫌悪率
(1) 練習を直接指導できない日があること	0	3	1.94	.90	96.8	0	3	1.43	.94	83.1
(2) 試合や練習をするのに十分な部員数が確保できないこと	0	3	.95	1.03	57.4	0	3	.92	1.08	50.1
(3) 部員との人間関係がうまくいかないこと	0	3	.96	.74	75.3	0	3	1.30	1.09	70.2
(4) 校務が忙しく、部活動指導が満足にできないこと	0	3	2.01	.88	97.1	0	3	1.71	.98	89.5
(5) 部員の考えていることが理解できないこと	0	3	1.07	.66	85.5	0	3	1.14	.93	72.9
(6) 部員に向上心が欠けていること	0	3	1.43	.83	89.8	0	3	1.54	.99	83.4
(7) 顧問もしくは外部指導者と価値観の違いを感じる	0	3	.72	.89	48.5	0	3	.67	.97	40.2
(8) 自分自身と部員の活動意欲に差を感じる	0	3	1.27	.85	83.9	0	3	1.23	.93	75.9
(9) 自分自身の指導力と部員の競技力に差を感じる	0	3	1.29	.99	77.2	0	3	.96	.97	60.3
(10) 部員が上達しないこと	0	3	1.24	.91	79.9	0	3	.81	.81	60.3
(11) 自分自身の指導に、生徒からあからさまに不信な態度をとられたこと	0	3	.67	.69	56.3	0	3	.84	.97	52.3
(12) 他の顧問もしくは外部指導者の、生徒への態度に疑問を感じる	0	3	.58	.77	44.2	0	3	.67	.96	39.9
(13) 保護者と運動部活動に対する価値観の違いを感じる	0	3	1.05	.84	74.0	0	3	1.17	1.04	68.6
(14) 部活動によって、土日が無いような生活を続けていること	0	3	2.09	1.06	89.8	0	3	1.25	1.03	71.3
(15) 他の顧問もしくは外部指導者と意思の疎通がはかれないこと	0	3	.62	.81	45.8	0	3	.61	.89	39.4
(16) 学校全体と自分自身の部活動に対する志気	0	3	.77	.91	51.7	0	3	.70	.93	45.0
(17) 部員が指導内容を理解しないこと	0	3	.94	.82	69.7	0	3	.70	.75	54.7
(18) 管理職と運動部活動に対する価値観の違いを感じる	0	3	.50	.78	37.0	0	3	.56	.91	33.8
(19) 部員間に活動意欲の差があると感じる	0	3	1.60	.90	91.2	0	3	1.12	.87	74.3
(20) 校務に追われて部員とゆっくり語り合う時間が取れない	0	3	1.68	.94	91.4	0	3	1.47	.95	85.5
(21) 自分の指導力が不足していると感じる	0	3	1.86	.94	94.6	0	3	1.65	.99	87.7
(22) 教科、分掌、部活動の両立が難しくなったこと	0	3	1.59	.98	86.6	0	3	1.47	1.02	81.8
(23) 部員が心を開いてくれない	0	3	.92	.69	76.4	0	3	.97	.87	67.3
(24) 部活動に費やす時間外勤務の負担が大きすぎる	0	3	1.80	1.12	84.2	0	3	1.32	1.08	73.2
(25) 試合や練習をするのに十分な活動時間が確保できない	0	3	1.43	.99	81.5	0	3	1.22	.97	74.8
(26) 部員との意思疎通がうまくいかない	0	3	.88	.66	74.5	0	3	.87	.80	66.0
(27) 部活動に費やす時間が多く、校務に十分な時間を当てられない	0	3	1.07	.92	71.0	0	3	.94	.92	62.5
(28) 部活動指導に対して、保護者から一方的な批判を受けた	0	3	.75	.74	60.3	0	3	1.12	1.15	58.2
(29) 部活動指導を努力しても、生徒の保護者から満足な評価を受けられない	0	3	.76	.82	56.6	0	3	.84	1.02	50.7
(30) 部活動の出費に対して自己負担がある	0	3	1.35	1.09	73.5	0	3	.97	1.06	55.8
(31) 自分自身の部活動指導のあり方に、保護者からあからさまに不信な態度を取られた	0	3	.60	.76	47.5	0	3	.82	1.07	45.0
(32) しっかり活動していてもなかなか結果(大会での成績等)がついてこない	0	3	1.24	1.00	74.5	0	3	.90	.93	59.2
(33) 部活動指導の為、教材研究を行う時間的余裕が無い	0	3	1.12	1.05	65.7	0	3	.95	1.02	57.1
(34) 部活動に関して、保護者の協力が得られない	0	3	.53	.71	42.9	0	3	.54	.79	38.1
(35) 部活動の指導に同僚からの理解を得ていないと感じる	0	3	.34	.66	26.0	0	3	.36	.74	23.6
(36) 部員が言うことを聞いてくれない	0	3	.66	.75	52.5	0	3	.67	.87	46.6
(37) 部活動の指導が体力的に負担になる	0	3	1.01	1.02	60.9	0	3	.84	.99	52.5
(38) 部活動による時間外勤務に、十分な手当が確保されていない	0	3	2.05	1.14	84.5	0	3	1.84	1.18	80.7
(39) 保護者からの期待が大きいと	0	3	.83	.93	55.2	0	3	.45	.73	33.5
(40) 自分の時間(趣味など)がなかなか持てない	0	3	1.67	1.19	77.2	0	3	1.28	1.14	67.8
(41) 土日は半日の指導や練習試合があり、自分の時間に余裕が無い	0	3	1.93	1.10	86.9	0	3	1.38	1.08	75.6
(42) 試合や練習をするのに十分な場所が確保できない	0	3	1.34	1.12	71.8	0	3	1.17	1.08	65.7
(43) 部活動の顧問という職務が精神的負担に感じる	0	3	.88	1.00	55.2	0	3	.88	1.05	51.2

項目分析削除対象 (1) : $r = .36$, (2) : $r = .29$, (9) : $r = .39$, (10) : $r = .37$, (25) : $r = .37$, (32) : $r = .37$, (42) : $r = .36$

性を示すことができた。したがって、以上の結果と先行研究の指摘³⁵⁾³⁶⁾および内容的妥当性の観点から、本分析結果の因子構造は許容可能なモデルであると判断した。よって本研究では、7因子24項目の因子構造が妥当なモデルとして採用した。

尺度の信頼性を検証するために内的整合性の値を示すChronbachの α 係数を算出した(表

3)。 α 係数は.72-.91の値を示し、全ての因子において基準値の $\alpha = .70$ 以上を満たしていることから尺度の信頼性が確認された。

4.3 属性による比較

属性を独立変数、ストレッサー下位尺度得点を従属変数として独立サンプルのt検定(表6)及び、一元配置分散分析(表7)を行った。

表3 探索的因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）およびChronbachの α 係数

項目	因子負荷量							α
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	
(41) 土日は半日の指導や練習試合があり、自分の時間に余裕が無いこと	1.00	-.06	-.04	.00	-.07	.03	.02	.90
(40) 自分の時間（趣味など）がなかなか持てないこと	.91	-.07	-.02	.03	-.01	.02	-.07	
(24) 部活動に費やす時間外勤務の負担が大きすぎる	.74	.08	.04	-.06	.05	-.10	.06	
(14) 部活動によって、土日が無いような生活を続けていること	.73	.05	.04	.03	-.02	.06	-.02	
(23) 部員が心を開いてくれないこと	-.05	.95	-.07	-.01	.03	.00	-.03	.88
(26) 部員との意思疎通がうまくいかないこと	.00	.83	.03	-.03	.02	-.06	.11	
(3) 部員との人間関係がうまくいかないこと	.06	.71	.05	-.02	-.04	.16	-.08	
(11) 自分自身の指導に、生徒からあからさまに不信な態度をとられたこと	.01	.70	.01	.10	-.06	.04	-.08	
(31) 自分自身の部活動指導のあり方に、保護者からあからさまに不信な態度を取られたこと	-.01	.11	.91	-.01	-.06	-.09	.02	.89
(28) 部活動指導に対して、保護者から一方的な批判を受けたこと	-.04	.03	.84	-.03	.03	-.05	.05	
(29) 部活動指導を努力しても、生徒の保護者から満足な評価を受けられないこと	.08	.04	.82	.01	.00	-.03	.01	
(13) 保護者と運動部活動に対する価値観の違いを感じる	-.02	-.20	.72	.05	.06	.21	-.08	
(15) 他の顧問もしくは外部指導者と意思の疎通がはかされていないこと	.02	.00	-.02	.95	.00	-.03	.03	.81
(7) 顧問間もしくは外部指導者と価値観の違いを感じる	.02	-.04	.06	.80	-.01	-.06	-.04	
(12) 他の顧問もしくは外部指導者の、生徒への態度に疑問を感じる	-.10	.23	-.05	.49	.05	.13	.05	
(20) 校務に追われて部員とゆっくり語り合う時間が取れない	-.07	.05	-.01	-.01	.90	-.07	-.04	.79
(4) 校務が忙しく、部活動指導が満足にできない	-.05	-.14	.05	.04	.72	.05	.00	
(22) 教科、分掌、部活動の両立が難しくなった	.27	.13	-.04	-.05	.58	.01	.07	
(6) 部員に向上心が欠けている	.00	.09	-.08	-.09	-.05	.88	.00	.75
(8) 自分自身と部員の活動意欲に差を感じる	-.03	.06	.16	-.01	-.01	.65	.07	
(19) 部員間に活動意欲の差があると感ずること	.10	-.03	.02	.13	.08	.45	.01	
(16) 学校全体と自分自身の部活動に対する志気に差を感じる	-.04	-.15	-.03	.02	.04	.10	.74	.72
(18) 管理職と運動部活動に対する価値観の違いを感じる	.05	.07	.00	.08	-.08	-.10	.69	
(35) 部活動の指導に同僚からの理解を得ていないと感ずること	-.03	.01	.03	-.08	.02	.04	.67	
因子間相関								
F1	-	.45	.30	.27	.36	.35	.17	
F2		-	.44	.38	.21	.54	.36	
F3			-	.43	.22	.41	.44	
F4				-	.20	.41	.39	
F5					-	.25	.48	
F6						-	.30	
F7							-	

表4 因子名と定義

因子名	定義
第1因子：部活動の時間的負担	部活動への従事が負担に感ずること
第2因子：部員との意思疎通困難	部員との意思疎通が上手くいかないこと
第3因子：保護者の批判的態度	保護者の部活動指導に対する批判的な態度
第4因子：他の指導者との人間関係の悪さ	他の指導者と人間関係が上手くいかないこと
第5因子：指導時間の不足	部活動を直接指導する時間が足りないこと
第6因子：活動意欲の低い部員	部活動に取り組む意欲が低い部員のこと
第7因子：学校内雰囲気との相違	管理職や同僚など、学校内の部活動に対する意識が異なること

その結果、顧問の個人属性では、性別、年齢、指導教科、校内での役職有無、部活動での役割、過去の競技経験、部活動指導頻度において、統計的に有意な差がみられた。部活動に関連する属性では、過去3年間の競技成績において、統

計的な有意な差がみられた。

性別では「保護者の批判的な態度」($t=2.42$, $p<.05$)のみに有意な差がみられ、女性に比べ男性の方が高い得点となった。年齢による比較では、年代別の4群に分類し分析を

図1 運動部活動顧問のストレス尺度 確認的因子分析モデル

表5 因子間相関の平方とAVEの比較

因子	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
部活動の時間的負担	.71 ^a	.17	.07	.13	.07	.16	.02
部員との意思疎通困難		.67 ^b	.22	.39	.16	.08	.11
保護者の批判的態度			.68 ^c	.21	.18	.06	.19
他の指導者との人間関係の悪さ				.62 ^d	.18	.09	.13
指導時間の不足					.55 ^e	.05	.17
活動意欲の低い部員						.52 ^f	.24
学校内雰囲気との相違							.48 ^g

a : 「部活動の時間的負担」のAVE値, b : 「部員との意思疎通困難」のAVE値, c : 「保護者の批判的態度」のAVE値, d : 「他の指導者との人間関係の悪さ」のAVE値, e : 「指導時間の不足」のAVE値, f : 「活動意欲の低い部員」のAVE値, g : 「学校内雰囲気との相違」のAVE値

行った。その結果、「指導時間の不足」($F=7.53$, $p<.001$), 「活動意欲の低い部員」($F=3.96$, $p<.05$) と, 「学校内雰囲気との相違」($F=$

5.48 , $p<.05$) の3因子に有意な差がみられた。多重比較の結果では, 「指導時間の不足」では, 30歳代が50歳以上と20歳代より有意に高い得点

表6 属性間による下位尺度得点の比較 (t検定)

		部活動の時間的負担			部員との意思疎通困難			保護者の批判的態度			他の指導者との人間関係の悪さ			指導時間の不足			活動意欲の低い部員			学校内雰囲気との相違		
		M	SD	t値	M	SD	t値	M	SD	t値	M	SD	t値	M	SD	t値	M	SD	t値	M	SD	t値
性別	男性 (n=293)	12.30	11.58		5.12	5.61		6.11	7.23		3.04	5.17		9.97	7.46		6.75	5.61		2.68	4.45	
	女性 (n=80)	13.79	10.90	1.03	5.50	6.40	.52	4.13	6.29	2.42*	3.39	4.61	.55	9.79	7.49	.19	7.24	6.27	.67	2.68	4.71	.01
指導教科	保健体育教員 (n=85)	10.27	10.79		4.31	5.56		5.93	7.67		2.58	4.43		9.78	7.13		7.18	6.14		2.54	4.46	
	その他教科 (n=288)	13.31	11.55	2.62*	5.47	5.83	1.63	5.61	6.91	.36	3.27	5.22	1.11	9.97	7.56	.21	6.76	5.64	.58	2.72	4.52	.32
校内での役職	役職あり (n=117)	11.37	10.20		4.08	3.54		5.06	4.29		2.98	4.66		9.45	6.98		6.21	4.58		2.47	3.97	
	役職なし (n=256)	13.19	11.94		5.71	6.50	3.14*	5.97	8.03	1.43	3.17	5.23	.33	10.14	7.67	.83	7.16	6.20	1.66	2.77	4.72	.60
部活動での役職	顧問 (n=272)	12.24	11.56		5.32	5.89		6.05	7.16		2.99	5.10		10.25	7.34		6.79	5.70		3.06	4.91	
	副顧問 (n=101)	13.65	11.11	1.06	4.89	5.49	.63	4.71	6.80	1.62	3.45	4.92	.78	9.06	7.73	1.37	7.03	5.93	.35	1.66	2.91	3.35*
過去の競技経験	経験あり (n=236)	11.73	10.76		5.10	5.75		5.74	6.92		3.21	5.32		10.51	7.71		6.89	6.03		2.83	4.80	
	経験なし (n=137)	14.15	12.42	1.91	5.37	5.86	.44	5.60	7.37	.18	2.95	4.57	.48	8.92	6.91	2.06*	6.81	5.27	.12	2.41	3.92	.93

***: p<.001, *: p<.05

表7 属性間による下位尺度得点の比較 (一元配置分散分析)

		部活動の時間的負担			部員との意思疎通困難			保護者の批判的態度			他の指導者との人間関係の悪さ			指導時間の不足			活動意欲の低い部員			学校内雰囲気との相違		
		M	SD	F値	M	SD	F値	M	SD	F値	M	SD	F値	M	SD	F値	M	SD	F値	M	SD	F値
年齢	20歳代 (n=124)	12.84	12.02		6.02	7.40		5.48	7.78		2.90	4.74		8.53	6.44	7.53***	8.02	6.80		1.81	3.80	
	30歳代 (n=118)	13.33	11.61		5.50	5.53		6.22	7.62		3.88	6.20		12.07	7.83	20歳代	6.96	5.71	3.96*	3.67	5.31	20歳代
	40歳代 (n=50)	12.30	11.27	.46	4.50	3.56	2.50	7.14	7.26	1.96	3.10	5.14	1.65	11.44	8.44	50歳以上	6.30	4.85	20歳代>50歳代	3.78	5.35	50歳以上
	50歳以上 (n=81)	11.44	10.46		3.94	3.99		4.33	4.39		2.32	3.17		8.01	6.82	<30歳代	5.28	4.01		1.88	3.02	<30歳代
指導頻度	低頻度 (n=82)	16.88	12.50	7.76***	5.56	6.87		6.40	8.55		3.95	5.25		11.61	8.12	4.47*	7.30	6.32		2.48	3.74	
	中頻度 (n=118)	11.94	10.71	低頻度>中頻度	5.19	5.01	.23	5.50	6.33	.54	3.58	5.84	3.4*	10.43	7.18	低頻度	6.90	5.20	.40	3.01	5.09	.47
	高頻度 (n=173)	11.06	10.96	中頻度>高頻度	5.03	5.74		5.47	6.82		2.40	4.24		8.79	7.16	>高頻度	6.62	5.85		2.55	4.41	
部員数	小規模 (n=130)	11.72	10.17		5.35	6.39		5.10	6.37		2.66	4.13		10.42	7.74		6.88	6.00		3.08	4.66	
	中規模 (n=130)	12.00	11.50	1.93	5.17	5.38	.07	6.15	7.82	.75	3.72	6.12	1.55	9.25	6.91	.85	7.08	6.03	.25	2.74	4.86	1.35
	大規模 (n=113)	14.37	12.60		5.07	5.55		5.82	6.98		2.93	4.61		10.14	7.73		6.57	5.14		2.14	3.81	
過去3年間の成績	市大会 (n=167)	13.23	11.62		5.32	5.69		5.14	6.83		3.56	5.82		9.80	6.93		7.73	6.12	5.17*	2.28	3.90	
	県大会 (n=149)	12.98	11.31	1.96	5.44	6.12	.97	6.34	7.49	1.12	2.85	4.03	1.28	10.19	8.09	.17	6.59	5.46	市大会>県大会	3.07	4.94	1.24
	関東大会以上 (n=57)	9.88	11.03		4.23	5.12		5.58	6.67		2.49	5.00		9.61	7.32		5.00	4.92	県大会以上	2.82	4.88	
土日の活動時間	4時間未満 (n=90)	11.20	11.30		6.27	7.18		6.01	8.53		2.86	5.22		9.03	6.50		7.40	6.51		3.04	5.45	
	半日: 4時間以上 (n=252)	13.23	11.54	1.14	4.84	5.27	2.04	5.40	6.21	.92	3.18	4.89	.16	9.98	7.56	2.02	6.58	5.43	.92	2.36	3.84	2.80
	概ね全日 (n=31)	11.77	10.95		5.03	5.04		7.10	8.96		3.32	5.94		12.13	8.87		7.55	5.98		4.23	5.98	

***: p<.001, *: p<.05

【部員数: 小規模=5人~24人, 中規模=25人~40人, 大規模=41人~120人】、【指導頻度: 低頻度=1~2日/週, 中頻度=3~4日/週, 高頻度=5~7日/週】

を示している。「活動意欲の低い部員」では、20歳代と50歳以上に有意な差が認められ、20代の方が高い得点を示した。「学校内雰囲気との相違」では30歳代が、20歳代と50歳以上より有意に高い得点を示した。指導教科では、保健体育とその他の指導教科による比較を行った。結果、「部活動の時間的負担」(t=2.62, p<.05)に有意な差がみられ、その他教科の方が保健体育に比べ高い得点であった。校内での役職有無による比較では、「部員との意思疎通困難」(t=3.14, p<.05)に有意な差がみられた。役職なしの方が、役職ありに比べ高い得点であった。部活動での役職では、「学校内雰囲気との相違」(t=3.35, p<.05)において顧問の方が、副顧問に比べ有意に高い値を示した。顧問の過去の競技経験有無による比較では、「指導時間の不足」(t=2.06, p<.05)に有意な差がみら

れた。過去に経験がある顧問の方が、過去に経験がない顧問に比べ有意に高い値を示した。顧問の指導頻度による比較では、1週間のうちに1日・2日指導する顧問を低頻度指導群、3日・4日指導する顧問を中頻度群、5日以上指導する顧問を高頻度群と分類して分析を行った。その結果、「部活動の時間的負担」(F=7.76, p<.001)と「他の指導者との人間関係の悪さ」(F=3.40, p<.05),「指導時間の不足」(F=4.47, p<.05)に有意な差が認められた。多重比較の結果、「部活動の時間的負担」では中頻度群と高頻度群に比べ、低頻度群が高い値を示した。「他の指導者との人間関係の悪さ」では、多重比較の結果ではいずれにおいても有意な差を示さなかった。「指導時間の不足」では低頻度群が高頻度群と比較し、有意に高い値を示した。過去3年間の成績による比較では、「活動

意欲の低い部員」($F=5.17$, $p<.05$)に有意な差が認められた。多重比較の結果、市大会出場経験部活動の顧問より、関東大会出場経験部活動の顧問の方が低い値を示した。

5. 考 察

本研究の目的は、顧問が部活動において認知しているストレスを明らかにし、ストレス尺度の作成を試みることであった。さらに顧問や部活動の属性間の比較を行い、属性間のストレス認知の違いを明らかにすることを目的としていた。分析の結果、顧問のストレスは7因子構造であることが明らかとなり、作成された尺度の妥当性と信頼性の検討が行われ、許容可能なモデルとして採用された。また、属性によってストレスの認知に違いが存在することが明らかとなった。

本研究は、先行研究⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽²⁵⁾を参考にストレスに関する項目を作成し、部活動の顧問歴が20年以上の中学校教師2名と部活動の施策にも精通しているスポーツ政策の専門家1名、スポーツ政策を専攻とする大学院生6名の計9名によって内容的妥当性を確認した。分析に際してはIT相関分析を行い、基準値を満たした弁別性の高い項目を用いた。弁別力が確認された36項目を用いて探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、7因子構造が得られた。探索的因子分析で得られた7因子構造を仮説モデルとし、確認的因子分析を行った結果、構成概念妥当性および内容的妥当性等の総合的な観点から、7因子構造が妥当性のある許容可能なモデルとして採用された。また、Chronbachの α 係数は、全ての因子で基準値を満たし信頼性が確認された。以上より、一部の妥当性に課題を残すものの、妥当性と信頼性を有した顧問のストレス尺度が作成できたといえる。さらに、本研究では尺度の簡便性と先行研究からの指摘⁽³⁷⁾を考慮し尺度作成を行った。また、本研究で用いられたサンプルは、B市内の地域と学校規模に偏りが無いよう考慮して抽出が行われている。よって、作成された尺

度は利便性と汎用性が比較的高いことが推察される。

顧問のストレスサーとして、部活動への従事を負担に感じることを示す「部活動の時間的負担」が第1因子として抽出された。高校運動部活動顧問教員の悩みや負担として、「時間的負担」に加え「金銭的負担」「体力的負担」のカテゴリーが抽出されている⁽²⁵⁾。本研究においては、探索的因子分析の結果から、部活動における負担として最も因子負荷量が高かった4項目は「土日は半日に指導や練習試合があり、自分の時間に余裕が無いこと」「自分の時間(趣味など)がなかなか持てないこと」など、時間的負担に関する項目であった。顧問は時間的な従事に対する対価として金銭的な手当を求め、部活動の指導を長時間行うことによって体力的な負担を感じていることが推察できる。つまり、時間的負担が最も部活動における負担として説明できる要因と考えられる。さらに、「部活動の時間的負担」は保健体育科以外の教科を指導している顧問にとってより衝撃性の強いストレスサーであることが明らかとなった。教師の勤務時間外に多く行う職務として、教材研究等の授業準備が挙げられている⁽²⁾⁽³⁾。このことから、教科別による教材研究等の他の職務に費やす時間の違いが関連していると考えられる。また、指導頻度が少ない顧問がよりストレスサーとして強く認知している。ラザルス・フォルクマン⁽²⁷⁾の認知的評価モデルにおいて、ストレスは心理的な認知プロセスと生理的変化や情緒的变化を伴うストレス反応の全体的な過程として捉えられている。また、ストレス反応の発生が慢性化した場合、心身の疾患や社会的失敗などの結果を生じさせる可能性も指摘されている。したがって、指導頻度が低い顧問の方が「部活動の時間的負担」をストレスサーとしてより強く認知しているという本研究の結果は、顧問自身にとって部活動に従事することは対処困難な状況であると感じ、結果として部活動の指導頻度を少なくするという行動をとっている可能性を示唆している。ただし、より詳細な因果関

係を明らかにするためには、対処可能性の認知、ストレス反応、指導頻度を全体的な認知プロセスと行動の関係でとらえる必要があり、縦断的な研究が求められる。

顧問は部員との意思疎通がうまく図れていないことをストレスサーとして認知していることを示す、「部員との意思疎通困難」が第2因子として抽出された。コーチが認知する組織ストレスサーの「チーム」に関わるストレスサーの一つに「コミュニケーション」が抽出されている²¹⁾。「コミュニケーション」は選手や他の指導者、チーム組織の運営側との関係性が欠如していることを示している。また、中学校の教師が抱える生徒との人間関係の悩みに着目した研究では、「生徒への抵抗感」「指導上の困難」「生徒からの非受容感」「関わり不全感」を抱えていることが明らかとなっている³⁸⁾。このように、指導対象者との意思疎通が上手くいかないことは指導者にとってはストレスサーであり、運動部活動においても顧問は部員との意思疎通がうまくいかないことをストレスサーであると認知しているといえる。さらに本研究においては、校内で主幹や主任といった責任ある役職を担っている顧問の方が、役職がない顧問に比べ、「部員との意思疎通困難」の得点が有意に低い値を示した。大学競技スポーツの研究においてFrey⁴⁰⁾は、コーチの個人的要因や周囲の状況がストレスサーの認知に関連しているとした。さらに、そういった個人的要因や周囲の状況が、コーチのストレスサーの認知やストレス反応といった全体的な過程において、抑制要因となり得ることが指摘されている²⁰⁾。一方、教師においても、個人的要因としての「キャリア適応力」は、職業ストレスサーの認知を抑制する¹⁶⁾ことが示されており、教師の年齢や校務分掌、職位の関連による職務の性質の違いが、ストレスサーの認知に影響を与えることが示唆されている。以上の様な先行研究の知見から、役職を有する顧問は、役職を担うことで得られる責任感や職務内容、さらには学校内における生徒との関わりといった経験から学び、部活動に

おいて部員との関係性の中で意思疎通がうまくいかないことが生じても対処可能であり、弱いストレスサーとして認知していることが考えられる。

「保護者の批判的態度」が第3因子として抽出された。先行研究¹⁷⁾¹⁸⁾においても保護者に関連するストレスサーが抽出されており、保護者に関するストレスサーは、日本の教育現場における特徴的なストレスサーであることが指摘されている¹⁹⁾。本研究から、運動部活動においても保護者が顧問のストレスサーとして認知されることが考えられる。保護者は運動部活動を成立させている要因の一つであり、時に運動部活動の存廃を左右するほど影響力を持つことがある⁵⁾。本研究では、保護者が顧問に対しても影響を与える可能性が示唆された。保護者の顧問の指導の在り方に対する不満や批判が、ストレスサーとして顧問に認知され、顧問の心理や行動に影響を与えている可能性が考えられる。

教師やコーチにおいても職場内における同僚との対人関係に関わるストレスサーが確認されている¹²⁾¹³⁾¹⁵⁾¹⁹⁾²¹⁾。本研究において抽出された「他の指導者との人間関係の悪さ」も職務における対人的なストレスサーの一種であることが考えられる。顧問は、他の指導者の指導内容や価値観が自身と異なる時にストレスサーを認知することがあり、意思疎通が図れないことで本来協力すべき指導者同士が上手く連携を取れていない可能性が考えられる。属性間の比較の結果、一元配置分散分析では指導頻度に有意な差が確認された。部活動への指導頻度と、他の指導者との人間関係は関連していることが示唆されるが、多重比較検定においては有意な差は示されなかった為、結果の解釈には留意が必要である。

運動部活動の顧問が指導に際して最も問題、もしくは課題と感じていることに「校務が忙しくて思うように指導ができない」が報告されている⁸⁾。本研究により、顧問はそのような部活動の指導時間不足をストレスサーと認知していることが明らかとなった。小・中学校の教師が

実施困難な職務に対してストレスを認知している¹⁵⁾ように、顧問は部活動の指導時間が足りず、思うように指導ができない状況をストレスと認知していることが考えられる。さらに、指導頻度が少ない顧問の方が、指導時間不足をストレスとしてより強く認知しているという属性間比較の結果は、指導時間の確保に悩む顧問の実態を表していると言える。一方で、当該部活動の競技経験がある顧問の方が、経験のない顧問より、「指導時間の不足」をストレスとして強く認知している。上述した運動部活動顧問が抱える問題・課題では、体育以外の担当教科で、競技経験もない顧問のみ、「校務が忙しくて思うように指導ができない」が2番目に多く挙げられている⁸⁾。本研究では、指導教科による有意差は「部活動の時間的負担」で確認されているが、「指導時間の不足」においては確認されなかった。「指導時間の不足」への認知には競技経験の有無が、関連する顧問の属性であることが示された。また、年代による関連も示唆された。特に30歳代の顧問の方が、若手の20歳代やベテランの50歳代以上と比べ、指導時間が不足していることをより強くストレスとして認知している。若手の20歳代より30歳代の顧問の方がストレスとして強くされているのは、年齢に伴い教師としての職務内容や学校内における役割の変化が関連している可能性が考えられる。30歳代より50歳代の顧問の方が低いのは、実際に体を動かした実技指導などが可能かどうかといった部活動の指導方法が関連していることも理由として考えられる。

教師が職務において感じるストレスの1つとして、児童生徒の態度や意識に関連する因子が抽出されている¹²⁾¹³⁾¹⁷⁾¹⁹⁾。また、競技スポーツにおけるコーチのストレスとしても選手のパフォーマンスや意識、態度や行動などが抽出されている²⁰⁾²¹⁾。本研究においても、「活動意欲の低い部員」の因子が抽出され、顧問は部員の練習や競技に取り組む意識や態度に対してストレスを認知していることが明らかと

なった。20歳代の顧問の方が50歳以上の顧問より、活動意欲の低い部員に対する指導にストレスを認知していることから、経験年数が若い顧問は、部活動指導の方向性に悩むという運動部活動特有の葛藤¹⁰⁾を抱えている可能性が考えられる。また、過去3年間に、関東もしくは全国大会に出場経験がある部活動を担当している顧問より、市大会出場の部活動を担当している顧問の方が、部員の活動意欲が低いことをストレスとして強く認知している。活動意欲が低い部員が所属する部活動も、大会への参加に際しては先ず市の大会から参加となる。このような大会の仕組みを考えると、競技力の高い部活動には比較的活動意欲の高い部員が所属していることが推察される。したがって、部活動の競技力は部員の活動意欲と大いに関連していることが考えられ、部員と顧問の活動意欲の差が影響していることを示す結果と言える。

渋谷²⁵⁾は「活動環境」のカテゴリーにおいて、「学校の雰囲気」のグループを抽出している。本研究では構成概念として、同僚や管理職との価値観の違いや不理解などを示す「学校内雰囲気との相違」が抽出された。校長からのソーシャル・サポートの認知が教師のストレス反応を緩和させる可能性があり⁴²⁾、教師のバーンアウトには組織特性や同僚との関係が影響していること¹⁵⁾など、学校内との雰囲気と教師のストレス反応との関連性が確認されている。このことから、部活動に取り組む顧問に対して管理職や同僚からの支援が無いことや、部活動に対する志向性の違いといったような学校内の部活動に対する雰囲気が時に顧問にとってストレスと認知される可能性が示唆される。さらに、副顧問より顧問の方が、50歳以上の顧問より30歳代の顧問の方がストレスとして強く認知している。部活動における役職が部活動に対する責任感の違いを生み、顧問自身と学校内の部活動に対する考え方の違いに、よりストレスを強く認知していることが示唆される。また、部活動に対する考え方や取り組み方が30歳代と50歳以上の顧問では異なることが影響している

と推察されるが、本研究ではその詳細について言及することはできない。

本研究においていくつかの限界が指摘できる。まず指摘できるのは、配布方法の限界である。本研究はA県B市の教育委員会を介して学校単位で配布回収を行った。顧問教員が社会的に望ましい回答を行っている可能性は否定できない。今後は、回収方法に工夫が必要といえよう。例えば、教育委員会を介さずに直接回収し、その旨を質問紙に提示するといった対策が考えられる。また、本研究では中学校の顧問（週に1回以上指導）のストレス尺度を作成することを目的としたため、高校の顧問や、部活動の指導は行わず部活動の運営管理のみを行っている顧問については言及することができない。本尺度を高校の顧問に適用させる場合には結果解釈に留意が必要である。さらに、本研究によって作成された尺度は、内的基準によって妥当性が検討された。ストレスは全体的なプロセスでとらえることが重要であるという指摘²⁷⁾を踏まえると、今後はバーンアウトやストレス反応等の基準関連妥当性の検討を行っていくことで、より妥当性の高い検証が可能となる。

6. お わ り に

本研究では、運動部活動顧問のストレスを明らかにし、ストレス尺度を作成することが目的であった。結果、運動部活動顧問のストレスとして「部活動の時間的負担」「部員との意思疎通困難」「保護者の批判的態度」「他の指導者との人間関係の悪さ」「指導時間の不足」「活動意欲の低い部員」「学校内雰囲気との相違」の7因子が抽出され、顧問のストレス尺度が作成された。また、運動部活動の顧問は専門性を有しているほど指導時間が足りないことにストレスを抱えているなど、顧問の属性によるストレスの認知の違いが明らかとなった。今後、顧問が認知するストレスと部活動に対する態度等を示す心理的な変数との関連を検証することで、学校の運動部活動顧問の配置計画や外部資源の導入など、運動部活動

のマネジメントに有効な示唆を提示することができると考えられる。よって、運動部活動のあり方を検討する際には、指導者の指導実態のみならず、指導者の心理的な側面とその行動の関係性に着目していくことも重要な意義を有していることが考えられる。

(注1) 久保⁹⁾によると、部活動における指導者は「コーチ」もしくは「教師」として明確に位置づけることはできないとしている。本稿では、教師として学校の職務をおこないつつもコーチとして部活動に携わる指導者を研究の調査対象とするが、「外部指導者」との混乱を避けるため「顧問教師」、「顧問」として表記する。

(注2) 関東地域のA県B市では、時間外勤務の部活動手当支給額として次の時間区分が設定されている。1) 8時間以上；日額5,000円、2) 4時間以上8時間未満；日額2,500円、3) 2時間以上4時間未満；日額1,500円、4) 1時間以上2時間未満；日額1,000円。また、約70%～80%の中学校運動部活動が、土日において2時間～4時間未満の活動を行っている¹¹⁾。以上から、土日における活動時間は4時間の区切りの選択肢を設定することが妥当であると判断した。また、上記の手当支給額時間区分規定が存在することから、ストレス項目の内容的妥当性を確認している中学校教員2名により、「概ね全日」の表記が8時間以上であると認識できると判断された。なお、選択肢における時間は土日それぞれ1日当たりの活動時間を示す。

(注3) 経験率は出来事を経験したサンプルの割合を示し、「1. 全くなかった」以外の回答の比率を表す。同様に、嫌悪率は「1. 全く嫌ではなかった」以外の回答の比率を表す。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省；運動部活動の在り方に関する調査研究協報告書、運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議、2013、(2014年12月22日取得)、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afieldfile/2013/05/27/1335529_1.pdf.
- 2) ベネッセ；平成18年度教員勤務実態調査（小・中学校）、2006、(2014年12月22日取得)、<http://>

- //berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3261.
- 3) 岡田一秀；教員の多忙化と時間外勤務についての調査研究, 学校メンタルヘルス, Vol.13, No.1, pp.59-62, 2010.
 - 4) OECD (経済協力開発機構)；教員環境の国際比較－OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2013年調査結果報告書, 国立教育政策研究所編, 明石書店, 2014.
 - 5) 中澤篤史；運動部活動の戦後と現在－なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか－(第3版). 青弓社, 2014.
 - 6) 神谷 拓；運動部活動の制度史と今後の展望, 体育科教育学研究, Vol.30, No.1, pp.75-80, 2014.
 - 7) 関喜比古；問われている部活動の在り方－新学指導要領における部活動の位置づけ－, 立法と調査, 291号, pp.51-59, 2009.
 - 8) 公益財団法人日本体育協会；学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書, 2014, (2014年12月22日取得) <http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/houkokusho.pdf>.
 - 9) 久保正秋；コーチング論序説－運動部活動における「指導」概念の研究－, 不昧堂出版, 1998.
 - 10) 小谷克彦, 中込四郎；運動部活動において指導者が遭遇する葛藤の特徴, スポーツ心理学研究, Vol.30, No.1, pp.33-46, 2003.
 - 11) 文部科学省；運動部活動の在り方に関する調査研究報告, 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議, 1997, (2013年8月23日取得) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201.htm.
 - 12) Kyriacou, C., Sutcliffe, J.；A Model of Teacher Stress, Educational Studies, Vol.4, No.1, pp.1-6, 1978.
 - 13) Mrak G. Borg et al.；Stress in Teaching：A Study of Occupational Stress and Its Determinants, Job Satisfaction and Career Commitment among Primary Schoolteachers, Educational Psychology, Vol.11, No.1, pp.59-75, 1991.
 - 14) Robert M. Klassen, Ming Ming Chiu；Effects on Teachers' Self-Efficacy and Job Satisfaction：Teacher Gender, Years of Experience, and Job Stress, Journal of Educational Psychology, Vol.102, No.3, pp.741-756, 2010.
 - 15) 高木亮, 田中宏二；教師の職業ストレスに関する研究, 日本教育心理学研究, Vol.51, No.2, pp.165-174, 2003.
 - 16) 高木亮, 教師の職務葛藤とキャリア適応能力が教師のストレス反応に与える影響の検討－年代ごとの影響の比較を中心に－, 教育心理学研究, Vol.56, pp.230-242, 2008.
 - 17) 田中輝美, 他；教師用ストレス尺度の開発, 筑波大学心理学研究, Vol.25, pp.141-148, 2003.
 - 18) 塚本伸一；教師ストレス尺度作成の試み, 立教大学臨床心理学研究, Vol.4, pp.1-9, 2010.
 - 19) 西坂小百合；我が国における教師ストレス研究の現状と課題, 学校教育学研究論集, Vol.8, pp.13-24, 2003.
 - 20) David Fletcher, Michael Scott；Psychological Stress in Sports Coaches：A Review of Concepts, Research, and Practice. Journal of Sports Sciences, Vol.28, No.2, pp.127-137, 2010.
 - 21) Richard C. Thelwell et al.；Stressor in Elite Sport：A Coach Perspective. Journal of Sports Sciences, Vol.26, No.9, pp.905-918, 2008.
 - 22) Richard C. Thelwell et al.；Coping with Stressors in Elite Sport：A Coach Perspective. European journal of sport science, Vol.10, No.4, pp.243-253, 2010.
 - 23) 洪倉崇行, 森 恭；高校運動部員の心理的ストレス過程に関する検討, 体育学研究, Vol.49, No.6, pp.535-545, 2004.
 - 24) 洪倉崇行, 他；高校運動部員の部活動ストレスに対する認知的評価尺度の再構成. 体育学研究, Vol.53, No.1, pp.147-158, 2008.
 - 25) 洪倉崇行；高校運動部活動顧問の悩み事や負担の実態：ストレス尺度開発に向けた予備的研究, 人間生活学研究, Vol.4, pp.91-99, 2013.
 - 26) 文部科学省；平成26年度学校基本調査, 調査結果の概要 (初等中等教育機関, 専修学校・各種学校), 2014, (参照日2014年12月22日) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350732_02.pdf.

- 27) リチャード S.ラザルス, スーザン フォルクマン: 本明寛, 他監訳: ストレスの心理学－認知的評価と対処の研究－, 実務教育出版, 1984.
- 28) 新美明夫, 植村勝彦: 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて: ストレス尺度の構成, 特殊教育学研究, Vol.18, No.2, pp.18-33, 1980.
- 29) 橋本剛: 大学生における対人ストレスイベント分類の試み, 社会心理学研究, Vol.13, No.1, pp.64-75, 1997.
- 30) 島津明人, 他: 従業員を対象としたストレス調査票作成の試み (1) スレッサー尺度・ストレス反応尺度の作成, 産業ストレス研究, Vol.4, pp.41-52, 1997.
- 31) 岡安孝弘, 他: 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係, 心理学研究, Vol.63, No.5, pp.310-318, 1992.
- 32) 徳永幹雄: 第52回大会キーノートレクチャー: 体育心理学「体育・スポーツにおける心理尺度開発の動向と展望」, 体育学研究, Vol.47, pp.479-484, 2002.
- 33) Susan A. Jackson, Herbert W. Marsh: Development and Validation of a Scale to Measure Optimal Experience: The Flow State Scale, Journal of Sport and Exercise Psychology, Vol.18, pp.17-35, 1996.
- 34) 小塩真司: 研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析 (第2版), 東京図書, 2012.
- 35) 南風原朝和: モデル適合度の目標適合度－観測変数の数を減らすことの是非を中心に－, 行動計量学, Vol.29, No.2, pp.160-166, 2002.
- 36) 豊田秀樹: 共分散構造分析 [Amos編] (第7刷), 東京図書, 2014.
- 37) Claes Fornell, David F.Larcker: Evaluating Structural Equation Models with Unobservable Variables and Measurement Error, Journal of Marketing Research, Vol.18, pp.39-50, 1981.
- 38) 都丸けい子, 庄子一子: 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究, 教育心理学研究, Vol.53, pp.467-478, 2005.
- 39) 四方健二他: 小学校教師の体育授業に対するコミットメントを促す要因の質的研究, 体育学研究, Vol.58, pp.45-60, 2013.
- 40) Melinda Frey: College Coache's Experiences With Stress-“Problem Solvers” Have Problems, Too, The Sport Psychologist, Vol.21, pp.38-57, 2007.
- 41) 長谷部慶章他: 小・中学校における特別支援教育コーディネーターの役割ストレスに関連する要因, 特殊教育学研究, Vol.49, No.5, pp.457-467, 2012.
- 42) 迫田裕子他: 教師が認知する校長からのソーシャル・サポートに関する研究, 教育心理学研究, Vol.52, pp.448-457, 2004.